The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	神の存在・本質・力能 : スピノザ『エチカ』におけるその同一性と原因の一義性
Author(s)	藤野, 幸彦
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2013, 47, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

神の存在・本質・力能

── スピノザ『エチカ』におけるその同一性と原因の一義性 ──

藤野　幸彦

キーワード：スピノザ／エチカ／神／原因の一義性

序

その主著『エチカ』において、スピノザは「神の存在とその本質は同一（unum et idem）である」と述べ（E1P20）、[1] また「神の力能は神の本質そのもの（ipsa essentia）である」とも語っていた（E1P34）。だとすれば、スピノザにおいて神の存在と本質、そして力能は同じものである――彼の言葉を見る限り、我々にはこのように言うことが許されよう。

神は必然的に存在する実体であり、従ってその本性には存在することが属している。ならば神の本質を表現する属性は、神の存在をも同時に表現していなければならない。神の存在と本質の同一性をスピノザが証明する概略はこのようなものであった。ここから分かるように、神における存在と本質の同一性とは、神が自己原因である、ということの言い換えとして理解しうる。

一方、神の力能と本質の同一性をスピノザは以下のように示していた。「神の本性の単なる必然性からして、神は自己およびすべての事物の原因であるということが帰結する。故に、神自身およびすべてのものがそれによって存在しかつ働きをなす神の力能は神の本質そのものである」という証明がそれである（E1P34D）。存在と本質の同一性。そして、力能と本質の同一性。この二つの証明は、共に原因という観点から論じられていると言ってよ

い。加えて、「神が自己原因と言われるその意味において、神はまたすべてのものの原因であると言われなければならない」（E1P25S）ともスピノザは述べていた。だとすれば、存在と本質、力能という三つの要素が焦点を結ぶのはこの同義性、即ち、神における原因の一義性というテーゼにおいてである。このような構図がスピノザにあることはまず間違いない。[2)]

ならばこの時、一義的に理解される原因の内実とはいかなるものとなるだろうか。本稿はスピノザにおける原因概念の整理を通じて、神の存在・本質・力能の同一性というテーゼに明確な輪郭を与えることを目指すものである。

1

スピノザにおける原因概念――本稿のキーワードである原因の一義性を考察するにあたって、まずはこの原因概念について『エチカ』の本文より幾らか敷衍することから始めたい。

神は自己原因であると言われるその意味において、またすべてのものの原因でもある。原因の一義性に言及するこのテーゼは、『エチカ』第一部・命題16に参照して語られていた。

> …というのは、与えられた神の本性から事物の存在と同様に、その本質もまた必然的に結論されなければならないことが（命題16から）帰結されるからである。一言で言えば、神が自己原因と言われるその意味において、神はすべてのものの原因であると言われなければならない。（E1P25S）

> 神の本性の必然性から、無限に多くのものが（言い換えれば、無限知性の下に配されうる全てのものが）、無限に多くの仕方で帰結しなければならぬ。（E1P16）

スピノザの定義によれば、自己原因とは「その本質が存在を含むもの。あ

るいはその本性が存在するとしか考えられないもの」である（E1Def1）。すると自己原因であるところの神の本性から、事物の存在と本質が必然的に結論されるとスピノザは言っていることになる。この主張は自己原因と事物の産出の結びつきを示すものと言えるだろう。

加えて、ここで本稿が注目したいのは以下の表現である。神の本性から事物の存在と本質が結論される（concluditur）。あるいは、無限に多くのものが無限に多くの仕方で帰結する（sequitur）。これらの用語はいわゆる産出（producere）とどのように関わっているのだろうか。

この疑問に対する答は、『エチカ』の中では明示されていない。しかし、上記の命題16の備考においてスピノザは以下のように述べていた――神は無限知性の下に配されうる全てのものの起成因（causa efficiens）である、と。では、この起成因とは何か。残念ながらスピノザによる定義は与えられていないが、しかしこれはブルヘルスダイクやヘーレボールトの議論から踏襲した術語であることが指摘されている。[3] そのヘーレボールトによれば、起成因は次のように定義されていた。

【起成因 causa efficiens】

> 起成因とは、事物が真の因果作用（causalitas）によってそれから由来する（proficiscor）ところの外的原因である。[4]
>
> （*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap.17, Quaest.1.）

ヘーレボールトはこの起成因をさらに八つの仕方で分類しており、その下位区分の幾つかは『エチカ』でも援用されている。しかし本稿はここで特に『エチカ』では言及されていない区別、流出因（causa emanativa）と活動因（causa activa）とのそれに言及したい。ヘーレボールト自身による規定は以下の通りである。[5]

【流出因 causa emanativa】

それから事物が無媒介に（immediate）、特に、媒介する活動なしに生じる（emanat: 流出する）ような原因〈が一般に流出因と呼ばれる〉。火がその内に留まる自身に内的な熱の原因であるように。また全てのものの形相（forma）はその諸特性の流出因である。

（*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap.17, Quaest.5）

【活動因 causa activa】

活動を通じて結果を産出するところの原因〈が活動因である〉。火が自身の熱するものの内にある〈他のものの内に産出されるところの〉外的な熱の原因であるように。

（*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap.17, Quaest.6）

何故、この区別をスピノザは『エチカ』において取り上げなかったのか。単に触れる機会がなかった、というのではなく、ここには彼が先達の議論を咀嚼し、消化した軌跡が現れていると言うべきであろう。以下に挙げるのは『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』（以下、『短論文』と略起）における一節である。

神は自らの生じた結果の流出的ないし表現的原因であると我々は言う。また、作用が働いているという点から言えば神は活動的ないし作用的原因である。以上の二つは相互に関連するから、我々はこれを一つにする。（『短論文』第一部・第三章）

流出因／活動因という区別が『エチカ』の中で見られない理由は、今や明らかであろう。スピノザはこの区別を、少なくとも神に関しては適切なものと見ていなかった。とはいえ、単にこの区別を拒否した、という結論も早計であろう。スピノザはこれらが相互に関連するが故に、一つにする、と述べているのである。

話を戻そう。事物が結論される（concluditur）、また帰結する（sequitur）という『エチカ』における表現は、産出（producere）と如何なる関係にあるのか。本稿の回答はこうである――即ち、結論する、あるいは帰結するという表現は流出因としての側面、産出という表現は活動因としての側面を、それぞれ示しているのではないか。実際、同じヘーレボールトによる著作である『メレテマータ・フィロソフィカ』では「流出因の結果が帰着し、また帰結する（resultat ac sequitur effectum causae emanativae）」とも述べられ、また「活動因とは、それにより活動の媒介を通じて結果が産出される原因である（*Activa* est, a qua effectum producitur mediante actione：強調は原文のまま、訳に際して省略された語を補った）」という記述を我々は見ることができる。

結論される、あるいは帰結するというような語が産出と全く同じ意味を持つとまで主張しうるかは別としても、これらの述語はスピノザにおいて密接に関連付けられている。そしてこのことが、流出因／活動因の統合に基づいていることは恐らく間違いない。また本稿が見る限り、この統合は原因の一義性という問題を考える上でも重要な意味を持つものである。

2

さて、本稿は流出因／活動因という起成因における区別が、『エチカ』において失われている――恐らくより正確には、統合という仕方で発展的に解消されていることを確認してきた。またその理由は、これら二つが相互に関連するから、というものである。では、その関連とはどのようなものだったのか。両者が統合されるに至ったその事情を考察してみたい。

先に言っておくと、この論点についてもスピノザが明示的に語る機会はなかった。しかし、ヘーレボールトの議論にそのヒントが示されていたと本稿は見ている。彼の議論を確認しておこう。

『メレテマータ・フィロソフィカ』によれば、流出因とはその現実存在に

より原因となるような原因であり、無媒介的にそれから結果が流出するような原因である。対して活動因の場合、活動の媒介によって結果が産出される。即ち、活動因が原因、因果作用（活動）、原因されたもの（causatum）という三項によって考えられるのに対して、流出因と結果の間には媒介となるようないかなる因果作用もない。流出因は原因および原因されたものの二項のみで考えられる――流出因においては原因の現実存在そのものが因果作用であり、逆に結果が原因を定立するという関係も成り立つ、とヘーレボールトは述べていた。[6] 改めて簡単に纏めれば、原因の現実存在そのものがその因果作用となるのが流出因、また自身の現実存在と異なる因果作用（これが活動と呼ばれている）を持つものが活動因だということになろう。

このように整理した上で、ヘーレボールトは以下のように問うている。活動因において原因と原因されたものを媒介する因果作用、即ち活動とは如何にして生じるのか、と。この種の因果作用は、流出因のように原因と存在において等しい、と言うことができない。しかし、活動もまた何らかの仕方で原因されていると言われねばならないはずである。

仮にこの活動が、同じ原因が有する他の活動によって原因されているとしたら無限後退に陥ることは明らかであろう。故に、この因果活動は流出によって当の活動が属する原因から原因されている。このように言う必要があるとヘーレボールトは考えていた。

> この故に活動因は、活動を通じて産出された結果の観点からは活動因と言われる。また同じ活動因が、それから流出し、またそれにより結果を産出するところ活動の観点から言えば流出因と言われ、また（実際に）流出因なのである。このことを支持するものが、恐らくは真理に最も近づく。（*Meletemata philospica*, Vol.2, XII, §.VIII）

活動因は活動を通じて結果を産出すると同時に、その当の活動の流出因でもある。このヘーレボールトの回答を受けて、流出因と活動因が相互に関連

する、という先のスピノザの主張は理解されるべきであろう。活動因の活動とは、つまるところ流出因としての当の原因自身の結果である。彼が挙げた火の例を考えてみれば、その構図は次のようになっていた。

既に見た通り、火は自身の特性であるところの内的な熱の流出因であり、また火により熱されたものにおいて生じる外的熱の活動因である。さらにこの時、火は外部のものを熱する熱作用、即ち火の因果作用の流出因でもある。流出因はその現実存在そのものが因果作用である、と言われたことをここで思いだそう。活動因における活動（因果作用）とは、その活動が流出により原因されるところの因果作用（即ち、流出因としての現実存在そのもの）に由来する、二次的な作用として考えられるに至るのである。

従って流出因／活動因という区別は、原因と原因されたものの間の媒介（即ち原因の現実存在と区別される因果作用としての活動）の有無、この一点に絞られることになる。

> …それ故これら二つの原因、即ち流出因と活動因の間にある全ての差異は無媒介に（immediate）という語に存する。この語は流出因において、いかなる種類のものが考えられようとも、全ての媒介を排除するのである。　（*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap17, Quaest.6, note3）

『短論文』において両者が統合されるに至った理由も、こうした論点と無縁ではないだろう。ヘーレボールトの図式に引き付けて言うなら、神は流出因として無媒介的に自身の諸特性を帰結するとともに、自身から流出する二次的な因果作用、即ち活動による活動因として、諸事物を産出していることになる。[7)] もう少し強調するなら、活動因として原因が働くためには、まず自身が有する活動の流出因でなければならない。二つの原因が相互に関連する、とはこういうことであろう。

とはいえ、結論する、帰結する、等の術語の使用にも見られたように、この統合は流出、また活動という要素の消失を意味するものではなかった。そ

のことを示唆する言明を『エチカ』から取り上げたい。

> …私は神が有する最高の力能（summa Dei potentia）、あるいは無限の本性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で、即ち、すべてのものが必然的に発出したこと（effluxisse）、または常に同一の必然性において帰結すること、そしてこのことが三角形の本性からその三つの角の和が二直角に等しいことが永遠から永遠に渡って帰結するのと同じ仕方で帰結することを十分明瞭に示したと信じる。　（E1P17S）

発出（effluere）という語が流出（emanere）と関連付けて用いられていることは明らかと思われるが、しかし、本稿が注目するのはこの発出が「三角形の本性から三つの角の和が二直角に等しいことが帰結する」ことと同じ仕方である、という言及である。ヴィリヤーネンが紹介するところによれば、ここには17世紀当時に行われた幾何学の学問的地位に関する論争の影響が見られるという。[8)]

当時支配的だったアリストテレス的な考えに従えば、ある説明が学問的であるためには、考察対象となる現象の原因を明らかにする必要があった。しかし、例えば三角形の内角の和が180度であることの証明を、何か原因を示したものと考えることは難しい。そのために、幾何学の学問性に疑問が付されていた。このようにヴィリヤーネンは述べている。

この学問性を保証するような因果的説明が可能であるとすれば、それはどのようなものか。これに対する回答は、図形の本質をある種の形相因、諸特質をその結果と位置付ける、というものであった。[9)] ヘーレボールトによって、事物の形相がその諸特質の流出因として規定されたことを思い出されたい。図形とその諸特質の関係を、形相からの流出という因果関係に基づいて解釈することで、幾何学者達はこの問題を退けようとしていた。またヘーレボールトによれば、定立された理性的な魂によりその知解する能力が定立され、また逆に知解する能力により当の理性的な魂もまた定立される、というように、流出因においては原因と原因されたものは互いを定立しあい、また

除去しあうという。[10] この必然的な結びつきは、確かに幾何学における図形と特質の関係を扱うにも好適なものであっただろう。

スピノザには、この幾何学上の議論への明示的な言及はない。しかし、ボクセル宛書簡に見られる次の一節は当時の議論をスピノザが知っていたことを十分に示唆するように思われる。

> 三角形の三つの角の和が二直角に等しいことを認めるならば、私はそれが偶然によって生じることをもまた直ちに否定します。同様に、熱が火の必然的結果であることを見とめるならば、私はそれが偶然により起こることをもまた直ちに否定します。 (Ep.56)

ヘーレボールトが流出因の例として挙げていた火と熱の関係が、三角形と内角の和の関係に等しいものとして考えられている。つまり、スピノザは流出因において三角形とその内角の和の関係を捉えていたのではないか。だとすれば、『エチカ』において三角形の例を取り上げた際、スピノザには神による産出の中に流出因の要素を見いだす意図があったとも言われねばならない。スピノザにおいて、流出という要素が無視されることはなかった、と言ってよいように思われる。

3

本稿はここまでスピノザにおける原因概念を、起成因における流出因／活動因の区別、またスピノザによるその統合という観点から検討してきた。簡単にまとめるならば、流出因と活動因の区別は、無媒介性という一点に存する。そしてこの区別を踏襲しながら、スピノザは一次的な因果作用としての流出と、それに基づく二次的な因果作用としての活動、という仕方で両者を統合した。[11] 同じ一つの原因が、自身の活動の流出因であり、また活動という媒介を通じ生じる結果の活動因ともなるのである。

スピノザにおける原因の一義性とは、この統合に基礎付けられたものに違いない――以下に続けられる本稿の主張は、こうしたものである。

スピノザは、神の存在はその本質と同一である、と述べていた。ここで言われる同一性は、本質からの存在の導出、あるいは逆に存在からの本質の導出、といった事柄を意味しない。神の本質を構成する属性が、同時に神の存在を構成する。こうした言及からも分かるように、スピノザが主張したのは存在と本質の間に存する端的な同一性なのである。自己原因とはこの同一性において成立する事柄である、と言ってよいだろう。

この時「神が自己原因と言われるその意味において、神はまたすべてのものの原因であると言われなければならない」という件の主張、即ち原因の一義性とはいかに理解されるべきか。本稿の回答はこうである。即ち、流出因として見られる神において、神の現実存在はその因果作用と等しい――この現実存在と因果作用の同一性こそが原因の一義性の謂いである、と本稿は主張する。

神は自身の現実存在と等置される因果作用、自己原因であるというそのことによって、その諸特性と、自身がそれにより活動因と見られるところの二次的な因果作用、即ち活動を産出する。自己原因であることと全ての事物の原因であること、これらが神において厳密に同じ意味を持つとすれば、それはこういうことであろう。神が自己原因であり、従って必然的に存在していることが、諸事物の産出と言う活動の必然的存在をもまた含意しているのである。

既に明らかなように、このことは流出因と活動因の統合を通じて初めて可能となる。この統合がなされていなかったとすれば、神がそれによって活動因として働くところの活動が、当の神自身から流出する、という図式は不可能であっただろう。神が流出因であると同時に、自身から流出する活動を通じて産出する活動因であること。そして、これらがともに神の現実存在をその根拠としていること。原因の一義性とは、スピノザによる原因概念の吟味の結果として得られたテーゼだと言われねばならない。

こうした本稿の主張は、『エチカ』における様態の産出に関する議論にもよく合致するものと思われる。以下に挙げるのはいわゆる直接無限様態、また間接無限様態と呼ばれるものに関する命題である。

> 神のある属性の絶対的本性から帰結するものは全て、常にかつ無限なものとして存在しなければならない。あるいは、その属性によって永遠でありかつ無限である。（E1P21）

> 神のある属性が、その属性自身を通じ必然的かつ無限なものとして存在するような様態的変状に様態化した限り、この属性から帰結するすべてのものもまた必然的に、かつ無限なものとして存在しなければならない。（E1P22）

書簡（Ep.63）においてシュラーはこれら神から直接的に産出されるもの、また無限の様態的変状を媒介として産出されるものについて、スピノザに例を求めている。スピノザによる返答で挙げられたのは、前者については「思惟においては絶対に無限なる知性、延長においては運動および静止」、また後者は「無限の仕方で変化しながらも常に同一に留まる全宇宙の姿」であった。また、スピノザは以下のように両者を規定している。

> …故に必然的にかつ無限なものとして存在する様態は、神のある属性の絶対的本性から帰結されねばならない。そしてこのことは無媒介的にか、あるいはその絶対的本性から帰結するような、言い換えれば、必然的にかつ無限なものとして存在するような、ある種の様態的変状を通じて媒介的に帰結するかでなければならない。（E1P23D）

無限様態は神の本性から無媒介的にか、あるいは媒介的に帰結する――既に触れた通り、ヘーレボールトは流出因と活動因の区別を媒介の有無に求め

ていた。この対応は無視されるべきではない。無媒介的に生じる直接無限様態という媒介を経て間接無限様態が産出される、という同様の構図をここに見ることができるのである。

またここでいう媒介とは、原因自身の現実存在から区別される因果作用、即ち活動であった。ならばスピノザの体系において媒介となるもの、即ち直接無限様態もまた、神の本性から流出する活動として位置づけられるのではないか。この論点はなお検討されねばならないが、しかし本稿は紙幅の都合からこれを指摘するに留めおきたい。加えて、個物の産出が如何にこの図式の内で位置づけられうるかもまた一つの課題となろう。全宇宙の姿、と呼ばれる間接無限様態の産出は、神の本性から無限に多くのものが帰結する（E1P16）というテーゼの内実を示すものとして理解されるべきである。しかしこの無限様態と個物の関係は、本稿における議論のみでは明示されるに至らなかった。これもまた解かれるべき問いである。積み残したこれらの課題については、稿を改めて論じることにしたい。

結

本稿はスピノザにおける原因概念の分析を通じ、神における存在・本質・力能の同一性というテーゼの内実を探る試みを進めてきた。本稿が確認してきたところによるなら、このテーゼは起成因における流出因／活動因という区別を統合し、一つのものとすることで成立していた。

神において、存在と本質は同一のものである。神が自己原因と言われるのはこのことであった。この神の必然的な現実存在は、流出因という観点から神を捉える限り、流出因としての神の因果作用と同じものだと理解することができる。これを本稿は一次的な因果作用と位置づけることができよう。

また自己原因であるという一次的な因果作用を通じて生じる活動、本稿が二次的な因果作用と呼んだそれを通じ、神は諸々の諸事物をも産出するのである。それ故に、自己原因であるという正にこのことによって、神は諸々の

事物をもまた産出していると言われねばならない。これこそ、原因の一義性として我々が理解すべき事柄であった。神は同一の意味において現実存在し、かつ諸事物を産出するのである。

神の本質とその力能の同一性とは、従って以下のように理解されるべきであろう。神の本質と同一であるところの神の存在が、取りも直さずまた神の因果作用であり、そしてこれこそが神の力能であると。

本稿の考察は以上である。このように見ていくならば、スピノザの体系は絶対に無限なる実有、即ち神が必然的に存在すると言われる時、その他の全ての事物もまた神の存在と同じ原因において存在している、そうした体系としてやはり理解されねばならない。恐らく神における存在・本質・力能の同一性とは、そうした体系として自身を指し示す、その優れた表現の一つなのである。

［注］

1） 以下、本稿はテキストの参照箇所を以下のように示す。E…『エチカ』、命題…P、証明…D、備考…S、系…C。またアラビア数字は『エチカ』の部や定理の番号等を表わしており、例えば本文にある「E1P34」は『エチカ』第一部・命題34を示すものと了解されたい。なお、Epの略号で書簡を示す。
また、本稿は引用に際して畠中尚志氏の邦訳を主に参照し、また必要に応じこれに手を加えている。

2） 原因の一義性（l'univocité de la cause）というタームを、本稿はドゥルーズから借用した。また、ドゥルーズによれば原因の一義性とは自己原因と起成因が同じ意味を持つということではなく、これらの二つが原因であるもの、即ち神について同じ意味において言われることを意味しているという。本稿はこのドゥルーズの言に概ね一致しながら、神における存在・本質・力能の同一性というテーゼを解釈するものである。
Cf.Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression* (1968), Chap. X.

3） 邦訳の『エチカ』、『短論文』それぞれの註において、畠中尚志氏が両者の名を挙げている。また、ゲルーはその著作においてヘーレボールトによる起成因の分類と『エチカ』の関係について一章を割いて論じている。
Cf.Gueroult, *Spinoza I Dieu* (1968), Chap.VIII.

4）　本論に直接かかわる事柄ではないが、ここで言われる外的原因とは起成因と目的因を質料因と形相因（これらは内的原因と呼ばれる）から区別するための分類であることを補足しておく。ヘーレボールトによれば、質料因と形相因は原因されたものの本質に、あたかもそれを構成する部分であるかのように関係することから内的原因と呼ばれる。また真の因果作用、という表現は起成因と目的因を区別するものである。
Cf.*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap15&16, Quaest.3, note1. ならびにChap.18, Quaset.1を参照。

5）　ヘーレボールトによる他の細別は、それぞれ「内在因／超越因」・「自由因／必然因」・「それ自身による原因／偶然による原因」・「主要因／補助因」・「第一原因／第二原因」・「普遍因／特殊因」・「最近因／遠隔因」という7区分であり、本稿が扱う流出因／活動因の区別を含めて『短論文』で取り上げられている。
『エチカ』では流出因／活動因、普遍因／特殊因を除く6対について言及があり、本稿の解釈がスピノザの原因概念と合致するか否かは本来これら諸区分にも目配せして行われるべきであろう。しかしこれらの区分が基本的には独立に成立すること、また紙幅の都合から本稿はこうした議論を取り上げなかった。

6）　*Meletemata philospica*,Vol.2, XII. これらの議論は『ヘルメネイア・ロギカ』にも踏襲されており、その例は本稿p.9にもある理性的魂と知解能力のそれである。

7）　この際、流出因における因果作用と活動因における因果作用の間になお区別が存することに注意されたい。というのも、流出因における因果作用においては、原因が存在するにも関わらず結果が生じていない、ということは考えられない。これに対し、活動因においては何らかの障害により因果作用が阻害され、結果が生じないということが可能なのである。
Cf.*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap17, Quaest.6, note3.

8）　Cf.Viljanen, *Spinoza's Geometry of Power* (2011), Chap.2, §3.

9）　Ibid.p.43.

10）　*Hermeneia Logica*, Lib.1, Chap.17, Quaest.5, note1.

11）　本稿は一次的、二次的な因果作用、という言葉を用いているが、これらは時間的な順序を指すものではなく、あくまで論理的な順序を指していることに注意されたい。流出による因果作用とは、火とその内的な熱という例を挙げたように、時間に関わらないものとして解されねばならない。従って流出という一次的な因果作用により生じる二次的な因果作用（活動）とは、時間に関わることなく成立するところの結果である。その限り、両者に時間的な前後関係はありえないと言えよう。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

God's "Existence, Essence, Power":
The Sameness of Theirs in Spinoza's *Ethics* and the Univocity of Cause

Yukihiko Fujino

Spinoza says, in his masterpiece *Ethics*, "God's existence and his essence are one and the same" (E1P20). In addition, it is Said that "God's power is his essence itself" (E1P34). From these two Statements, we can figure that the three aspects of God — Existence, Essence, Power — are the same.

While the former proposition is related to God's "Cause of itself," the latter is to God's "power of production," or in other words, God's being the cause of all things that happen. Therefore, we can also figure, the sameness of God's three elements is closely connected to what we call Univocity of cause.

In fact, Spinoza notes "God must be called the cause of all things in the same sense in which he is called the cause of himself" (E1P25S). But in what Sense can we say so? In other words, how can the univocity of cause become possible? To answer this question, it is helpful to follow the developments of Spinoza's thought.

In *Short TreatiSe on God, Man, and His Well-Being*, Spinoza integrates two Scholastic kinds of cause, emanative and active. In this paper, it is proposed that this integration is the very factor which makes the univocity possible. And through this argument, the thesis that God's existence, essence, and power are the same will be shown to be one expression of this univocity.